

浄土真宗で中陰や年忌の法要をおしとめする意味は？

● 質問 ● 『歎異抄』には「親鸞は父母の孝養（追善供養）のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず」（八三四頁）とのお言葉がありますが、それではなぜ、浄土真宗では中陰や年忌の法要を営むのでしょうか。

最近では地域によっては、葬儀のみで年忌（年回）法要が営まれなくなってきたというの聞きます。年忌法要というのは、人が往生して後に営む法縁のことをいいますが、とくに没後の四十九日間を中陰といい、その後、一年、三年、七年、十三年等と続いて営まれるものを年忌法要と呼んでいます。

まず中陰ですが、中陰とは人が死んで、次の生を受けるまでの中間の存在のことを意味します。この期間中、死者は次の生が定まらないといわれ、「灌頂経」巻十等では、七日毎に追善供養を勧める内容が説かれています。これは、死後七日毎と百日、一年、三年目に都合十名の王の裁断を受けて、それぞれ生前の行為に応じた生処が定まるという、中国で成立した十王信仰と密接に結びついており、日本にもこの考え方が平安時代末期には伝えられていたようです。

周忌・三回忌に当たっています。中国南宋末期の天台僧・志盤の撰述した『仏祖統紀』巻三十三には、中国においても儒教の喪の制度であった儀礼を仏事として取り込み、百日・一周忌・三回忌として営まれていたことが記されています。日本でも、平安時代中期の作品である『源氏物語』等を見ると、四十九日または一周忌の仏事である「果の業」が行われていたようです。百日・一周忌・三回忌は中国で始まった仏事ですが、七回忌・十三回忌等は、日本の風習によって中世以降に営まれるようになったようです。それがどのような形に決まられたのか確かなことは分りませんが、『易経』や十二支の影響によるのではないかと推定されます。『元亨釈書』によれば、十三回忌の法要は、鎌倉時代から営まれていたようです。

法要の意義について考えてみますと、それが先祖の追善供養でないことはいまでもありません。追善供養・追善回向という言葉の意味は、「追善」とは、死者の冥福のために、死者にゆかりのある生存者があとから追って善事を実践する仏事をいい、「回向」とは、功德を他にめぐらし、さし向けることです。自分のおさめた善行・功德をさとりに向かつてめぐらす行為のことです。「供養」とは、本来「尊敬すること」「礼拝すること」「尊敬をもつてうけること」「尊敬をもつてうけること」の意味です。そこからしだいに、尊敬の念をもって仏陀や教法、僧伽に対して飲食等を献上することをいうようになりまし。それが時とともに変容し、死者儀礼として一般に定着して、それを追善供養とか追善回向というようになったのです。

浄土真宗では、私たち凡夫

次に浄土真宗における年回

浄土真宗では、私たち凡夫

の往生にかかわる一切が、阿彌陀仏の本願力によると示されています。私たちの側からの追善といった考え方はありません。『教行信証』『教巻』の冒頭（一三五頁）に、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向については真実の教行信証あり

とあるのがそれです。私たちが浄土に往生することも、また浄土に往生した後に娑婆世界に衆生を救うために還相することも、そのすべてが本願力（他力）によると示されているのです。また『歎異抄』第五条（八三四頁）では、追善回向とか追善供養といわれる念仏が否定されています。その理由として二点を挙げています。一つは、父母を救うということは、実は一切衆生を救うという意味を持つから、とても凡夫にはできない

いということ。二点目は、念仏は他力回向の法であり、自らが造った功德ではないから、亡くなった者に施すといった性格のものではないという二点です。本主に衆生を救うとは、まず自らが浄土のさとりを完成した上でのことである、といわれています。

親鸞聖人によって、私たちの往生成仏に関わる一切が本願力回向と示されるのですから、私たちはただその法を聞いていくしかありません。その一つの機会が年忌法要でしょう。すでに浄土の聖衆となられた方々が、阿彌陀仏とともに回向してくださる法を聴聞させていただく場であるといいただくことが大切です。

なお、詳しくは、拙稿「浄土真宗における年回法要の意義について」（教学研究所ブックレット「真宗における伝道」所収）をご参照ください。（龍谷大学講師 普賢保之）